



## 遊ぶ 育つ

園長 野中 泉

お泊り保育の前日「のなちゃん、明日アトムに来る？」とみかん組の子に聞かれました。「来るよ（出勤）」と答えると「よかったなあ、明日はお泊り保育やで」。その言い方が、のなちゃんも来てくれたら安心だというようなものではなく、「明日は楽しいことあるから、あんたも、遊びに来てよかったねえ」というような口ぶりで、思わず吹き出してしまいました。

コロナ禍のこの1年半、私たち大人は「不要不急（要らない、急がない）」という言葉に照らし合わせながら、ほとんどの娯楽をあきらめてきました。しかし、子どもにとっての「遊び」は大人の「娯楽」とは、全く別なものです。子どもにとって「遊ぶこと」は「育つこと」。今年度は、いつもの年以上にそのことを一生懸命考えています。

人間の脳には、「前頭前野」という場所があります。脳の中でも、人間らしい思考や判断をしたり記憶や感情制御を行う、いわゆる「人間らしさ」をつかさどる大事な場所だと言われています。この前頭前野を育てていくためには、「めちゃくちゃ遊び」がいいという話を東京大学の公開講座で聞いたのは、もう20年以上前のことですが、この「めちゃくちゃ遊び」という印象的な言葉と共にとっても興味深く覚えています。その先生は、前頭前野の発達についてこんなふうに言われました。「前頭前野を育てるには、走ったり、飛んだりぶらさがったりの体を動かす幼児期の遊びがとても重要ですが、それでは、小さいうちからスポーツ教室に行かせればいいのかというと、そうではありません。人に教えられたルールを覚えたり、技術を習得するときに鍛えられるのは脳の別な場所だからです。意味や意義が先に決められていない、次にどうなるかわからないめちゃくちゃ遊びがいいんです。先がわからなくてドキドキしたり、予想外の展開にビックリしたり、面白がったり、うまくいかずに悔しがったり、次にどうするかを考えたり。そんな体験が、実は人間の思考する力や感じる力に直結する前頭前野を育てることにつながるのです」。私は専門家ではないので最新の脳科学的にこの見解がどうであるのかはわかりませんが、この話への納得は年を重ねるごとに、むしろ深くなります。

すいか組（4歳児）の子どもたちが散歩に行くのに手に々荷造りロープを持っています。おしゃぶり昆布の袋やバケツを持っている子もいます。聞けば、昨日散歩で通ったあぜ道の小川に魚がいたから今日はおしゃぶり昆布を餌に魚を釣るのだそうです。「のなちゃん、いっぱい釣れたらむらっち（村井栄養士）に料理してもらうねん」とみんな大真面目な顔で出かけました。

一方、トンネル公園に出かけたみかん組（5歳児）の子どもたちは、夏を盛りに鳴きまくるセミに大興奮。「あそこにもおる！」「あの木の低いところにも見える」「虫網持ってくればよかったな」「オレは、手で取れるで」。言葉どおり、素手で捕まえた勇氣あるひとりを皮切りに、次々に素手でセミを捕まえようとする子どもたち。息をつめてそーっと木に近づき、パッと素早く手づかみでセミを捕まえる、うまい！コツを掴む子たちがいる一方で、自分もセミがほしいけど、ビリビリと羽音が怖くて手を引っ込めては悔しがる子もいます。自分は捕まえられないけど、「この葉っぱの後ろにいるで！」と見つけるのは誰よりも早く、それはそれで尊敬を集めている子。「のなちゃん、ちょっとオレを持ち上げて」と上手に人を利用する子（笑）。次々捕まえては、欲しがる友だちにあげるセミ捕り名人も。「よし、オレが木に登るから、下から持ち上げて」と力を合わせている子たちもいる。もちろん、子どもたちが大騒ぎで木に登る頃には、セミはおしっこをして逃げてしまい「ちゃんと持ち上げろや」「お前が、重いんや！」と言い争いに。けんかもセミ捕りも真剣で汗だくな子どもたちに、思わず見惚れてしまいます。

散歩から帰ってきたすいか組。こちらもみんな汗だく、どろんこ、蚊にもくわれていますが、うれしそう。もしかして、荷造りロープでほんとに釣れた？と思いきや、今日の収穫はゼロ。「残念やったな」「もうちょっとやったのにな」口々に言いながら、それでも、満足気に戻っていく子どもたち。

4度目の緊急事態宣言、私たちが守っているのは、子どもたちのどんな時間か。改めて考えるアトムの夏です。